

## 意図の認知主義を評価する

鴻浩介（東京大学）

意図という心的状態の本性は行為論で繰り返し問題になってきた。それは欲求の一種なのか、あるいは信念の一種なのか。両者の混合物なのか。いずれでもない独特の心的状態なのか。とりわけ、信念との結びつきで意図を理解しようとする立場は「意図の認知主義」とよばれる。それはさらに強いものと弱いものに分けられ、強い認知主義は「行為  $\phi$  を行おう」という意図が「自分は行為  $\phi$  を行う」という信念と同一であると主張する。弱い認知主義は、その意図がその信念を含むと主張する。ほとんどの場合、弱い認知主義者は意図を信念プラス欲求の混合的状态とみなす。

認知主義の代表的なモチベーションは 3 つある。最も素朴なものは意図の言語表現に由来する。ある行為の意図を表現することで、私たちはその行為の実行にコミットするのである。Anscombe (1963) が述べた通り、「ちょっと散歩してくる——実際にはしないと思うが」という発話は不自然に響く。次に、単なる欲求にはない、意図特有の合理性の制約を説明できる。たとえば両立不能な 2 つの行為を同時に欲求することは不合理ではないが、同時に意図することは不合理である。認知主義はこうした不合理性を信念の不合理性に訴えて説明する (e.g., Harman 1976)。最後に、行為者が自分の意図的行為に対して持ちうる特権的な知識、すなわち実践的知識を説明できる。意図的に行為することと知りつつ行為することに本質的なつながりがあるとするれば、意図と信念（それが知識の要件を満たすことは別に論じねばならないが）にもまた本質的なつながりがあるはずだ (e.g., Setiya 2008)。今や理解される通り、これら 3 つはすべて弱い認知主義と強い認知主義に共通したモチベーションである。それゆえ、何らかの特殊な理論的枠組みからの要請がない場合は、あえて強い認知主義をとるモチベーションは乏しい。加えて、意図は動機づけに関する状態であるから欲求とも無関係ではありえない、という直観は強いいため、一般には弱い認知主義をとる論者のほうが多数派である。

だが、弱い認知主義でさえ反例が指摘できると言われてきた。代表的な反例候補は 2 種類に分類できる。まず、ある行為を意図しているが、その行為の性質により成功に自信を持たない場合。たとえば Davidson (1978) による「成功するか不明だがカーボンコピーを 10 枚同時に作る」というケースがある。もう 1 つは、現時点である行為を意図しているが、忘却や気変わり等により実行までに意図自体を失う可能性を自覚する場合。たとえば Bratman (1987) の「自転車で帰宅途中に本屋に寄るつもりだが、おそらく走り出すとそれを忘れてしまうだろう」というケースである。いずれの場合でも、行為者は（現時点で）当の行為を意図しているが、その行為を自分が実行しおおせるだろうと（現時点で）信じていない、と記述可能に見える。

さて、かつて報告者は実践的知識の分析を行い、正当化の信頼性主義を援用しつつ、実践的知識には 2 種類が存在するという独自の主張を行った (鴻 2017)。ごく手短かに述べれば、一方は行為たる出来事の物理的諸性質に関する知識であり、行為を引き起こす作用因果的なメカニズムによって正当化される。他方はその出来事がどのような種類の行為であるかに関する知識であり、その種類を決定する形相因果的なメカニズムによって正当化される。本研究ではこの区別を導入することで、認知主義をめぐる従来の

議論に新たな光を当ててみることを試みた。従来問題にされてきた信念は、作用因果側の実践的知識にあたるもののみであり、形相因果側の実践的知識にあたる信念はまったく論じられてこなかったのである。

この点を追求して得られた洞察として、とりわけ興味深いのは次の点である。上で確認した 2 種類の反例は、いずれも形相因果側の信念には生じない——少なくとも、生じることが非常に想像しづらい——と思われるのだ。形相因果側の信念は、「私が行っているのは  $\phi$  という種類の行為である」といった内容をもつ。そして、まさに行為者本人がそう考えている事実は、その出来事を  $\phi$  という行為たらしめる効力をもつ。この形相因果プロセスは通常の作用因果とはまったく異なっており、物理的諸要因が障害となつて失敗することはない。私の筆圧が十分強くなかったためにカーボンコピーの署名を作れなかったとしても、依然として私の行為は「署名する」という種類の行為であり、ここで形相因果は成立しているのだ。そしてそのことは、誰より私が自覚している。それゆえ、「行為の成功に自信を持たない」反例とパラレルになるものは形相因果側では生じない<sup>1</sup>。同様のことは「意図自体を失う」反例にも言えるだろう。原因（意図の形成）から結果（行為の達成）までに一定の時間経過を要する作用因果とは異なり、形相因果ではむしろ原因（意図の形成）と結果（行為の種類決定）が同時に生じるように思われるからだ。

もし以上が正しいならば、結論はこうなる。意図と本質的に結びつきうる信念は 2 種類あり、そのどちらかを問題にするかで意図の認知主義の評価は変わりうる。従来問題にされてきた作用因果側の信念にくらべ、形相因果側の信念はより反例をあげづらく、より認知主義テーゼを認めやすい。本研究の遂行を通じて得られたこの洞察はいまだ萌芽的なものにすぎないが、今後追求してゆく価値があるとはいえよう。

## 文献表

- Anscombe, G. E. M. 1963. *Intention*. 2nd ed. Harvard University Press.
- Bratman, Michael E. 1987. *Intention, Plans, and Practical Reason*. CSLI Publications.
- Davidson, Donald. 1978. "Intending." In *Essays on Actions and Events*, 2nd ed., 83–102. Oxford University Press.
- Harman, Gilbert. 1976. "Practical Reasoning." In *The Philosophy of Action*, edited by Alfred R. Mele, 149–177. Oxford University Press.
- Setiya, Kieran. 2008. "Practical Knowledge." *Ethics* 118 (3): 388–409.
- 鴻浩介. 2017. 「アンスコムの実践的知識論——「それが理解するものの原因となるもの」」 『哲学』 68: 169–184.

---

<sup>1</sup> 拙論でも述べた通り、行為者に意図があっても形相因果が成立し損なうことはあるだろう（鴻 2017, 178）。だがその状況でも、行為の種類に関する信念自体を行為者が持っていないことは考えづらい。